



日本小児精神神経学会 第37回研修セミナー特別講演

演題名：ぼくらの心に灯ともるとき

—思春期をやわらかく支援できないだろうか

講 師：青木 省三 先生（慈圭会精神医学研究所）

日 時：2025 年6 月14 日（土）9 時30 分～11 時30 分

会 場：川崎市総合福祉会館 エポックなかはら

参加費：本学会員は無料.

非会員は事前登録2,000 円, 当日登録3,000 円

申 込：第133回日本小児精神神経学会ホームページより



講師のことば

思春期には、来た道を振り返っても暗く、道の先も霞んで見えない、そんな難所にあたる時があります。そんな時は、力づくで難所を越えるよりも、薄っすらとでも見える灯を頼りに、手探りで難所を越えていきたい。でも、その灯とはどんなものでしょうか。

旅の力を教えてくれたのは、不登校の男子中学生でした。彼は診察室でも、元気がなかったのですが、ある時突然、「ハワイに行ってみたい」と言い出しました。それから紆余曲折はあったものの、ついに一人で沖縄のビーチに出かけ、帰ると難所を越えていたのです。

街の力を教えてくれたのは、摂食症の女子中学生でした。母親との外食を勧めたら、カフェめぐりを始めました。スイーツを食べ比べ、やがて父親と居酒屋をめぐり（もちろん酒は飲みません）、いつのまにか普通に食べていました。

店の力を教えてくれたのは、解離症の男子高校生でした。学校に行く途上で倒れることを繰り返していました。ある時、街の店で服を買いはじめ、「カッコいいなあ」と感心していたら、気がついてみると倒れなくなり、やがて病院に来なくなりました。

学校の力を教えてくれたのは、小学生の女子でした。家族からも友人からも離れてポツンと一人でいたのですが、学校の教師がミシンを教えてあげました。家族や友人に、小さな物を縫ってプレゼントしているうちに、みんなの中に入っていたので驚きました。

家族の力を教えてくれたのは、「死のうと思う」とやってきた若者でした。診察室で父親は、「生きていてくれるだけでいい」と心を込めて繰り返し、若者はしだいに元気になりました。気がついてみると若者は、「生きようと思う」と話していました。

もちろん、いつもこのようにうまくいく訳ではありませんが、さまざまなことをきっかけに、ふっと若者の心に灯がともるのです。当日は、思春期をやわらかく支援することをめぐって、演者の考えをいくらか話したいと思います。

講師プロフィール

1952年に広島市の爆心地の近くで生まれ、育ちました。映画「仁義なき戦い」の舞台にもなったところです。1977年に岡山大学医学部卒業後、精神科医となり、同僚たちと共に思春期外来を立ち上げました。岡山大学精神科助教授を経て、1997年より川崎医科大学精神科学教室主任教授。2018年からは、公益財団法人 慈圭会精神医学研究所所長、川崎医科大学名誉教授となっています。1990年から91年には、ロンドン大学精神医学研究所、ベスレム王立病院青年期ユニットで研修しました。著書には、「ぼくらの中の発達障害」（ちくまプリマー新書、2012年）、「ぼくらの中の『トラウマ』—いたみを癒すということ」（ちくまプリマー新書、2020年）等があります。